

地名の由来と史跡と文化財

(加茂富山地区編)



国指定重要文化財 鳳来寺観音堂

上総の国いちはらの歴史を知る会

(ふるさと市原をつなぐ連絡会会員)

令和3年4月編集・製作

まえがき

人類は、今から700万年前にアフリカ大陸でサル類（チンパンジー）から枝分かれして「二足歩行の人類」となった。その後徐々に進化し約10万年前に一部の人類がアフリカを出ていくつかの人種に変化し大陸に住み着きました。

旧石器時代（先土器時代・無土器時代）～紀元前1万4千年前頃、我が国にも大陸から渡り来て住み着いたと思われます。その頃の日本列島はユーラシア大陸と地続きであり、彼らはマンモスやナウマン象、大角鹿などの大型動物を追いかけて日本列島にやってきた。食料調達には、主に狩猟や採取を行い、石を打ち砕いて造られた打製石器を使用した。食器などはなかった。

私たちの住みます「いちほら」にも人が住み始めて3万年の歳月が過ぎ、いくつかの大規模な集落が出来てきました。そして弥生時代になると大陸から稲作が持ち込まれ、肥沃な土地では稲作が行われるようになり、権力者による統治が始まった頃と思われます。その中で、大変興味深い説があります。縄文時代の頃に、日本列島に太平洋南方より現ポリネシア語（マオリ語）を話す民族が渡来し、住み着いた人たちが初めて地名を付けたという説です。それらの古い時代に付けられた今とあまり変わらない発音で、今も多く使われています。その中でも「古事記」や「日本書紀」などの古典や日本語の中にも、多くの現ポリネシア語源の言葉を見ることができますが、文字で表すものはありませんでした。

しかし弥生時代になると朝鮮半島より渡来した人により漢字が伝わって来て、今まで言葉で伝えられていた呼び方に、適当な漢字を当てはめたものです。例えば、日本の象徴の山「富士山」は、マオリ語では「フチ（HUTI）」「引き上げられた山、または釣り上げられた山」という意味となります。そして、浅間神社は熊野神社と並び最古の部類の神社とされていますが、富士山の神を祀る「式内富知（ふち）神社」が最も古い神社とされています。

縄文時代には、争いごとは少なかったと言われていたのですが、水稻耕作が始まった弥生時代になると「定住民」が増えることにより、土地の利権争いが起き、古くから住んでいた縄文人は弥生人に圧倒されることになった。但し、古くからあった地名すべてが「現ポリネシア語（マオリ語）」という訳ではありません。

北海道には「アイヌ民族」のアイヌ語があり、沖縄には「琉球民族」が話す「琉球語」が存在する。

また、それぞれの地方には「方言」があり、その地方特有の言葉があります。

参考ですが、古来より「サ」が付いた名には「神様」に関係したものが多く見られます。

例えば、神社の敷地内は「境内（ケイダイ）」という聖域と一般の地を分ける「さかいめ」があり、神様が山から「さと（里）」に下ってくる道を「さか（坂）」と言います。また、祀りの際の神様の貴賓席を「さじき」と呼び、庶民は地面の芝に座ったので「芝居」という言葉が生まれたと言われています。

今回は、上総国市原郡内の中央部に位置します「加茂富山地区」の地名の由来と、その地にある史跡や文化財などを紹介します。



市原郡内の富山地区の地名の由来

千葉県の名の由来

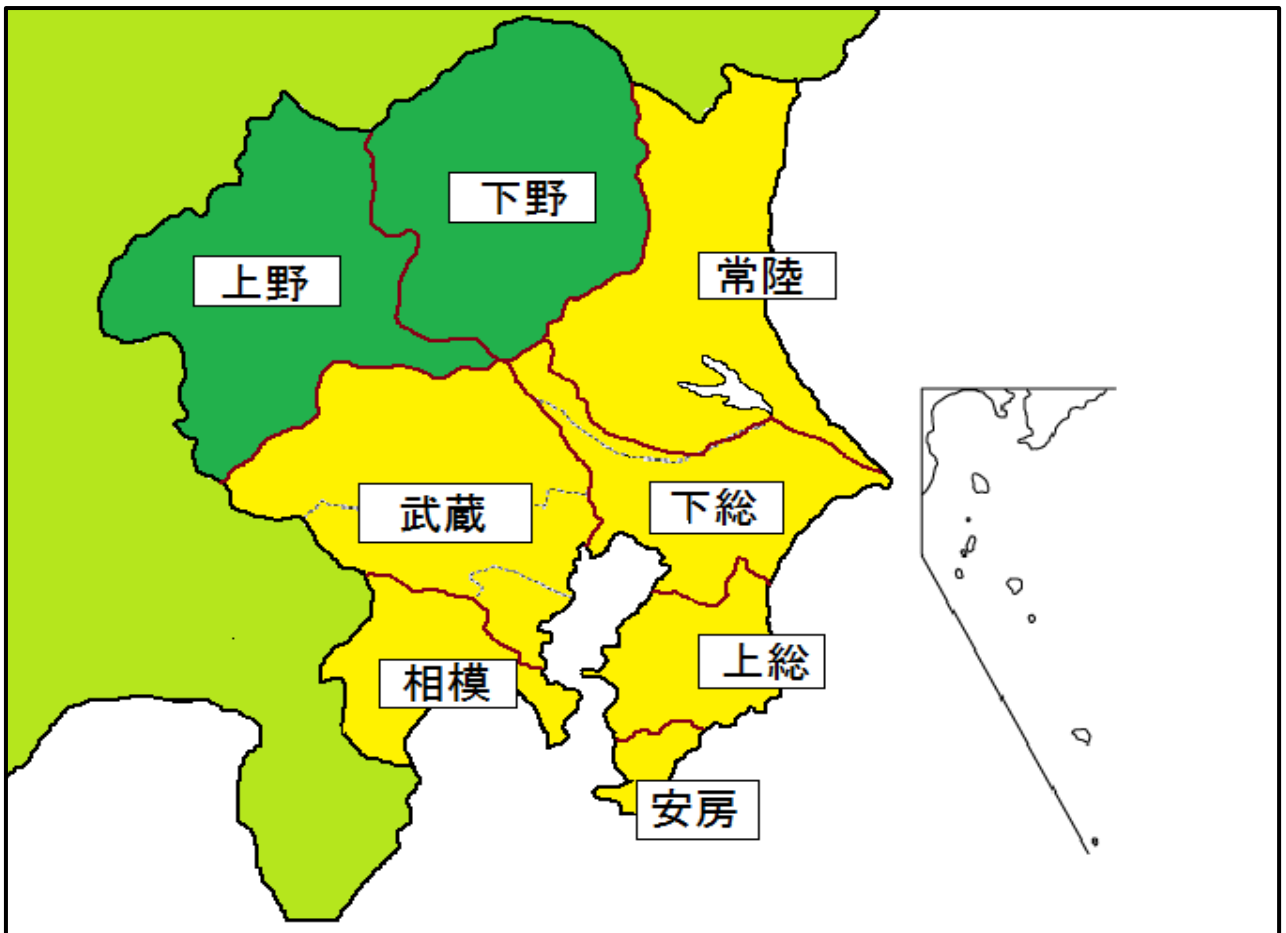
千葉県は江戸期までは総国（ふさのくに）と呼ばれており、茨城県南西部の一部と埼玉県東部の一部も含まれていました。この地域は7世紀後半の令制国の建置により、上総国と下総国が成立しその後養老2年（718年）に上総国から4郡が分かれ安房国が誕生した。

「総」の語源は、「古語拾遺」によると、「天富命（あまとみのみこと）」が安房国から齊部氏を率いて東上し、麻を植えたところ、良い麻が生えたので、総（麻）の国としたという説と、「風土記逸分」によると「総」とは木の枝を言い、昔この国に大きな数百丈のクスの木が生えていたが、大凶事との占いが出たので切り倒したところ、南に倒れたので、上の枝を「上総」と言い、下の枝を「下総」と言ったと記されているが、いずれも根拠が弱く、他にも「塞ぐ」からで「山などが周囲にある土地」や「ふし」の転訛で「高い所」の意味する説などがあるが、現在では朝廷の都に近いほうが上であり「上総」と付けられたという説が正しいと考えられる。

なお、「ふさ」はマオリ語で「フ・タ」で、「浸食された丘陵がある地域」の転訛と訳します。

「和名抄」に、下総国相馬郡布佐（ふさ）郷があり、現我孫子市東端の布佐の地域と思われる。上総国には、市原（国府所在地）・海上・畔蒜（あびる）・望陀（ぼうだ）・周淮（すえ）・天羽・夷隅・埴生・長柄・山辺・武射の11郡がある。

下総国には、葛飾・千葉・印旛・埴生・匝瑳・海上・香取・相馬・猿島（さしま）・結城・豊田の11郡が、安房国には、平群（へぐり）安房・朝夷（あさひな）・長狭の4郡で国造りがされた。市原郡は「伊知波良」と書き、中世には市西郡と市東郡に別れ、山田郡も郡域内にあったと思われます。国府の所在郡でもあり郡内には、海部（あま）郷・市原郷・湿津郷・江田郷・菊麻郷・山田郷の6郷があった。江戸期には、このほかに、海北郷・佐是郷など、旧海上郡域も併合された。



市原市の地区別地図

020/9/26

行政区-scaled.jpg (1829×2560)



市原郡内地名の由来と神社、仏閣、史跡、文化財の紹介

※ アンダーライン部は、古代マリオ後（現ポリネシア語）での表現を日本語に転化したもの。

上総国市原郡の6郷

1・海部郷（あまのこう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「安万」東急本は「阿万」と呼ばれており、海士有木に比定されている。漁業、航海を中心とした職業的品部に由来する地名。

2・市原郷（いちはらこう）

平安期にあった郷で、市原・能満・門前・郡本付近に比定されている。地名の「イチ」は集落の意味、または「稜威」（いつ）の転嫁で美称か。櫟（いちい）の繁茂する原野の意味とする説もある。

※藤井は、万治2年（1659年）に郡本より分村したのと、山田橋は元は山田郷に属していたので、市原郷には含まれなかった。

3・湿津郷（うるつこう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「宇流比豆」、東急本では「宇留比豆」。市原市潤井戸付近に比定される。地名の由来は、「ウルヒ（湿）・ツ（場所）」と考えられる。村田川の上流で、豊富な湧泉があることから命名された地名と思われる。

4・江田郷（えだこう）

奈良期にあった郷で、高山寺本・東急本ともに訓は「衣多」。市原市吉沢付近は古くは江田郷と称したと伝えられ、当郷の比定と思われる。他に、市原市八幡付や市原市江古田などを含む養老川上流右岸の広大な地域を郷域としている。

5・菊麻郷（くくまこう）

平安期にあった郷で、東急本では「菓麻」と書く。訓は、高柳寺本・東急本ともに（久々万）。

市原市菊間付近に比定されている。地名の由来は、「くくまった（包み込まれたような）・地」の意味

6・山田豪（やまだこう）

平安期にあった郷で、東急本の訓は「夜万多」。市原市山田付近に比定されている。

地名の由来は、「山を開いて田を作ったところ」の意味か、「山間の田」あるいは「山処（やまど）」の転嫁で、「山のある処」とも考えられる。

富山地区 (新井・吉沢・古敷谷・小谷田)

概説

この地区は、古来市原郡に属していた。里伝によれば吉沢はもとは江田郷と称し、古くは平蔵・吉沢を通じて吉沢の名称であったという。また、寛永18年(1641年)の水帳には、「長南領吉沢村」となっている。戦国時代、土橋平蔵忠勝は、この地に吉沢城を築き在城しており、同時代末期には小田原北条氏の幕下であったが、土橋忠吉の時に豊臣秀吉軍によって落城したという。

土橋忠勝は、平蔵城主土橋氏の一族で、平蔵城の支城として吉沢城を築き、この守護の為に本家の建立した西願寺光堂を見本に「善福寺観音堂」を建立した。(現在は鳳来寺の所有)

徳川の時代には、ほとんどが旗本の知行となったが、古敷谷の一部(木戸脇)は幕府領・小谷田も寛政5年に一部幕府領、幕末には鶴牧藩領、旗本知行などがあつた。

明治に入り、宮谷県管轄となり、同2年に鶴舞藩、同4年に木更津県、同6年に千葉県の管轄となった。

明治11年に郡市町村編制法施行の際、吉沢村は新井村・米原村と村連合を組織し、古敷谷村は1村で独立した。

明治22年の町村制の実施により4か村が合併し、地区全体が山に富んでいたことから「富山村」と称し、役場を古敷谷に置いた。昭和29年には町村合併促進法に基づき近隣4ヶ村が合併し「加茂村」となった。

昭和42年に市原市と合併した。

新井 (あらい) 神社・寺院・史跡文化財・城址 面足神社・安楽寺(天台宗)

江戸期は、新井村。名主は世襲した新井氏が当村の草分けといわれている。

地名の由来は、「あら(荒)・い(川)」で、洪水の多い川と言う意味と言われている。

面足神社 (おもだるじんじゃ)

所在地 市原市新井字宮ノ下148番地

創建時期 寛延3年(1750年)に創建

祭神 面足命

宮司 平田 常義

由緒・伝説 旧村社。寛延3年に創建。境内に八社合社で、山神社(大山祇命)・八坂神社(須佐之男命)・道祖神社(猿田彦命)・浅間神社(木花咲耶姫命)・阿具津智神社(阿具津智命)・飯網神社(日本武尊)・疱瘡神社(大己貴命)・天満宮(菅原道真:明和7年創建)がある。



新井 面足神社の拝殿の正面

面足尊は、古事記では兄を淤母陀琉神、妹を阿夜訶志古泥神と表記し、日本書紀では兄を面足尊(おもだるのみこと)、妹を綾惶根尊(あやかしきねのみこと)と表記する。

古事記においては、神代7代の第6代の神とされ、兄、淤母陀琉神が男神、妹、阿夜訶志古泥神が女神である。「オモダル」とは「完成した(=不足したところのない)」の意味で、

「アヤカシコネ」はそれを美称したもの。つまり、人体の完備を神格化した神です。

また今日に残る性器崇拝から男根の様相に対する賛美からの命名と考えられ、妹の阿夜訶志古泥神も同様の理由で、女陰のあらたかな靈能に対すて恐懼することの表象と考えられる。



狛犬の先の階段の奥に社殿



奥に見えるのが本殿の社



境内左にある天満宮の祠



八坂神社の石の祠



三峯神社の石の祠



稲荷神社の祠

安楽寺 (あんらくじ) 天台宗

所在地 市原市新井149番地

創建時期 不詳

本尊 不詳

住職 平野 孝典

由緒・伝説 創建時期。由緒不詳。
本堂は災害で無く、自治会館に
収められている。跡地に墓石のみ
ある。



**吉沢 (きちさわ) 神社・寺院・史跡文化財・城址 稲荷神社・国常立神社・鳳来寺・権現堂
鳳来寺観音堂・吉沢城址**

江戸期は吉沢村。地名の由来は、「あしさわ」から「よしさわ」その後「きちさわ」と変化したと考えられ、「あし(崖・崩れ地)・さわ(沢)」で、崖地の沢と言う意味。

地域内に、国の重要文化財の「鳳来寺観音堂」がある。

稲荷神社 (いなりじんじゃ) (阿保権現 あぼごんげん)

所在地 市原市吉沢字阿保谷91番地

創建時期 不詳

祭神 阿保親王

宮司 平田 常義

由緒・伝説 畑中に古墳のようになっており、掘れば

稲荷神社(阿保権現)の祠



凶事が起こったり病に罹ったりするという。

阿保親王は父が平城天皇、子に在原業平がいる。親王は葉子の変に連座し左遷されたが、叔父の嵯峨天皇に許され天長4年（827年）に上総太守に任ぜられている。この墳は阿保親王のものではないと思うが、墓なのか所縁の品を埋めたものか不明です。



石段の参道の先に鎮座する祠



祠の東側を写す。狐の守り神



祠の中には祭壇が祀られる

国常立神社（くにとこたちじんじゃ）

所在地 市原市吉沢字妙見下226番地

創建時期 永禄5年（1662年）創立

祭神 国常立命 神紋 右三つ巴

宮司 平田 常義

由緒・伝説 旧村社。北拝。永禄5年に創立された。境内に猿田彦神社（猿田彦命：石宮）と
グーグルマップでは妙見神社と表記されている合併殿がある。マップ画像で見た限りでは十二社神社の可能性もある。

国常立神社の本殿の社



神社入り口の鳥居と石段



十二社の神社を祀る建物か



軽打に置かれた千手観音石像

権現堂（ごんげんどう）

所在地 市原市吉沢876番地の山中

創建時期 不詳

祭神 不詳

宮司 平田 常義

由緒・伝説 創建時期・由緒不詳。地元の方の話では、最近は行ってないようだ。参道も獣道となっていて危険。



麒麟山鳳来寺観音堂 (きりんさんほうらいじかんのどう)

曹洞宗 国指定重要文化財

所在地 市原市吉沢244番地1

創建時期 不詳

本尊 不詳

住職 牧山 真美

由緒・伝説 鳳来寺観音堂は、もと吉沢城守護土橋平蔵の為に建立されたという善福寺の仏堂でしたが、寺が衰退し、明治16年に曹洞宗の麒麟山鳳来寺に合併された。観音堂は善福寺旧地にそのまま残されましたが、昭和41年に解体修理が行われた際に、現在の場所に移転された。西願寺阿弥陀堂と並び、室町時代後期を代表する建物です。



鳳来寺の本堂正面

堂の平面形は、桁行・梁間とも三間のいわゆる三間堂で、屋根は単層の茅葺き寄棟造の建物です。内部の正面には、一間幅の来迎壁があり、その前面に建築当初の須弥壇が置かれています。柱は棕柱で、周囲に切目録を巡らし、軒は二重の扇垂木で、二手先詰組を用いています。内部の架構や軒周りの組み物には禅宗様の特徴が見られる。



鳳来寺観音堂入口の標柱



観音堂の正面



観音堂の裏側写真

吉沢城跡 (きちさわじょう)

所在地 市原市吉沢字吉沢岱

創建時期 戦国期

築城主 土橋平蔵と思われる。

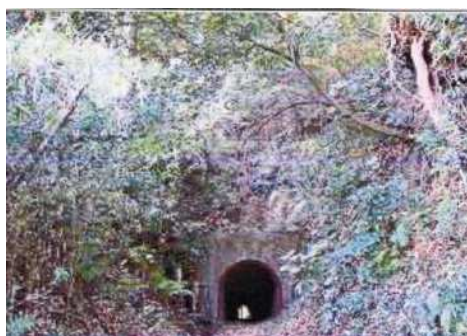
説明 伝承では、城主は土橋平蔵と言われています。しかし、現在みられる遺構は戦国期のものと思われる。粘土質の岩盤を大胆に掘り切るとい構造は、千本城、峰上城などに相通ずるもので里見の正木氏の関連が想像される。観音堂の背後にある比高40mほどの山が城址です。城跡に上がるには、集落の奥の台地を上がり、墓地の脇のトンネル辺りから登ると堀の1が見える。しかし、この堀は粘土質の岩盤を掘りこんだ深さ8mほどの大規模なもので、注意が必要です。



ここを登った所が4郭で、尾根上を削平した郭で、南北に細長い削平はそれほど徹底したものではない。この郭を南下してゆくと堀の2に出る。その堀幅は広く20m程ある。その堀の先に3の郭があり、ここの削平は徹底したものではなく、南北に細長い郭です。3郭の南側端の城壘の中央部には、切通し状の窪みがあり、その先に堀の3があり、深さは6mほどのものです。この先の1郭辺りが場内では削平をきちんとされた部分で、主郭と思われる。内部は高さ1~2mほどの段差で数段に分かれており、西側には腰曲輪などの配置されている。しかし10m×40mほどの規模であり、多数の人員を配備できる広さはない。1郭の北側に2郭があり、その先は高さ10m程の城壘になっている。そのあたりからかなり広い平坦地が下に向かって何段も配置されているが、近年まで水田として使われていたと思われる。このように、吉沢城は細い尾根を加工して郭を造成した城郭ですが、尾根は元々細いので、山上にはそれほど多くの人員を配置する事が出来ない城郭です。



吉沢城の跡の山と善福寺跡地



トンネルの上を上って城址に行く



岩盤を10m掘った堀切



腰曲輪の先にある内枅形



尾根の先端下の堀切



1郭南側の8mほどの堀跡

古敷谷 (こしきや) 神社・寺院・史跡文化財・城址 八坂神社・天津日神社・浅間神社・熊野神社・西蓮寺(天台宗)・長楽寺(曹洞宗)・観音堂・鑄造三尊形本地仏懸仏(市文化財)・大代城跡
江戸期は古敷谷村。地名の由来は、「こいき(浸食地)・や(谷)」で、浸食で出来た谷という意味。

八坂神社 (やさかじんじゃ)

所在地 市原市古敷谷字堀切170番地
創建時期 不詳
祭神 素盞鳴命
宮司 平田 常義
由緒・伝説 創建時期・由緒不詳。

八坂神社の本殿の建物





長い参道階段の途中に鳥居



本殿の入口の上に扁額



参道途中の湧き水で溢れる水鉢

天津日神社 (あまつびじんじゃ)

所在地 市原市古敷谷字木戸脇2087番地

創建時期 元禄2年(1690年)

祭神 天照皇太神

宮司 平田 常義

由緒・伝承 元禄2年の創建と思われる(記念碑に、平成5年創建300年の記入ある。)

天津日神社の本殿建物



境内入口の鳥居、奥には本殿



祭壇が飾られる本殿内部



八坂神社と金刀比羅神社の祠

浅間神社 (せんげんじんじゃ)

所在地 市原市古敷谷字関の沢2346番地

創建時期 不詳

祭神 木花咲耶姫命

宮司 平田 常義

由緒・伝承 創建時期・由緒伝承は不詳

県道沿いに建つ浅間神社の社



熊野神社 (くまのじんじゃ)

所在地 市原市古敷谷2671番地

創建時期 不詳

祭神 熊野久須毘命

宮司 平田 常義

由緒・伝説 旧村社。創建時期・由緒伝承不詳



熊野神社入り口の鳥居と階段



熊野神社の本殿の正面



本殿の右側

西蓮寺 (さいれんじ) 天台宗

所在地 市原市古敷谷字関谷294番地

創建時期 永禄5年(1562年)に開基

本尊 不詳

住職 浅野 亮栄

由緒・伝説 永禄5年に権僧都一行法印の開基。
高滝城主土橋氏の建立とされている。
本尊の阿弥陀如来は恵心僧都の作。

西蓮寺の本堂と手前は山門



本堂正面の入口



本堂を右側から写す



山門の右側にある地藏様

稲荷山長楽寺 (いなりさんちょうらくじ) 曹洞宗

所在地 市原市古敷谷574番地

創建時期 元亀2年(1571年)に創建

本尊 不詳

住職 林 哲徳

由緒・伝説 元亀2年に本寺真高寺5世理州舜城大和尚
を招請し現在地にて創建、当地以前は古敷谷
字向田にて斧州権旺和尚、権詰和尚、禅佐和
尚が寺務を執行している。

江戸時代初期に三世蘭山泉詰大和尚が1679年に常繁寺を創建。明治44年(1911)



平成15年に改修された本堂建物

年)に無住職となった常繁寺を合併した。

平成15年に本堂を改修、平成17年に鐘樓を改修されている。



長楽寺の参道入口の石燈籠



平成17年に改修された鐘樓



本堂入口と扁額



本堂内部の祭壇



鐘樓脇には祠が鎮座



境内には多くの地藏や石碑が

湯原山観音堂 (ゆはらさんかんのどう) 曹洞宗
所在地 市原市古敷谷字湯原山876番地
創建時期 不詳
本尊 不詳
住職 林 哲徳
由緒・伝説 行基作の十一面観音像が安置されている

観音堂の正面



観音堂の右側を写す



観音堂の正面入口と扁額



観音堂内に祀られる祭壇

鑄造三尊形本地仏懸仏 (市指定重要文化財)

所在地 市原市古敷谷地区
種類 彫刻
制作時期 室町時代初期

説明

鑄造三尊形本地仏懸仏は、直径20、1cm、厚さ3cmの鑄銅製円盤です。中央には十一面観音像が、また、両脇には拱手した如来形の像が、いずれも蓮台に座る形で半肉に鑄出されています。但し、壁などに懸けるための吊り輪や穿孔はみられませんので、古来の鏡に当たります。円板の縁辺に沿い、反時計回りに「応永十一年甲申弥生晦日」（1404年）下方に「大旦那左近太夫」の銘文が陰刻されており、室町時代初期の鏡像として重要な資料です。背面（鏡面）は仏像の部分だけがへこんでいる。古敷谷地区で管理。

（いちほら歴史の旅人の紹介文を引用）



古敷谷大代城址（こしきやおおしろじょう）

所在地 市原市古敷谷字立山

築城時期 不詳

築城主 不詳

説明 古敷谷大代城は、大羽根城の東南1.4kmの所にあった。県道加茂長南線を里見小学校の辺りから、長南方向に行くと途中でゴルフ場があり、城址の一部はゴルフ場の一部になっている。湯原観音堂のある辺りから西の山際に入って行く道があり、その左手の台地が城址と言われている。城址には土塁や虎口が残っていたが、ゴルフ場の造成の為残存状況は不明です。



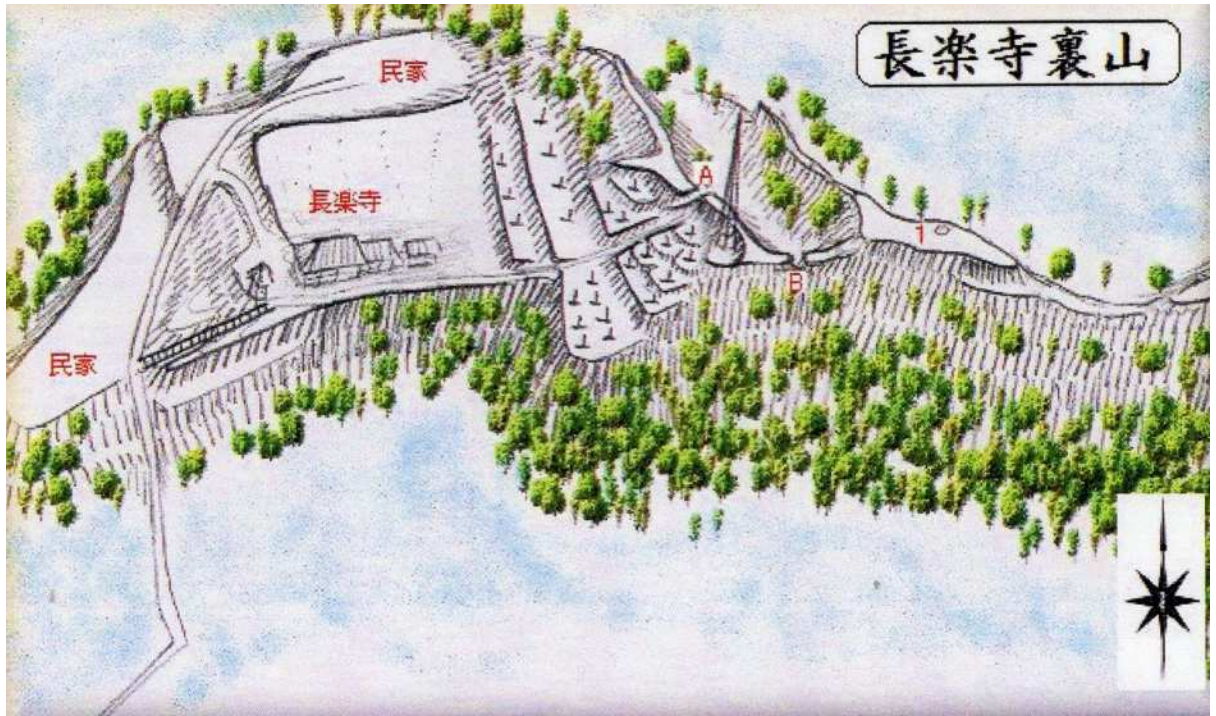
長楽寺裏山

所在地 市原市古敷谷574番地付近

築城時期 不詳

築城主 不詳

説明 長楽寺の背後の山稜には城址のような地形があり、調査した結果をラフ図にした。ここには明確な城郭遺構は残っていないが、それらしい遺構も見られる。長楽寺の裏の墓地から山稜上に上がって行くと、尾根上にAの切通しが見られ、一見して堀切のように見える構造ですが、堀切りというよりは切通しの道の名残りと思われる。さらに上に向かって進むと尾根上にBの深さ1mほどの堀切状の部分が見える。この先の尾根の上が1郭と思われ主郭があったと考えられる。これに連なる三方向の尾根にはいずれも堀切りなどはみられない。ただ、1の南側下には、人工的に削平した腰曲輪のようなものも若干みられるが、城郭遺構と言えるか断定できない。しかし、長楽寺のある場所そのものがかなりの要害地形となっているし、それなりの面積もある。戦国期辺りに、長楽寺そのものが戦乱期に備えて武装化していたならば、背後の山稜が防塁として意識され、そこに堀切が掘られた可能性が考えられる。そしてBは、武装寺院長楽寺の境界を示めすために掘られたものと考えられる。



小谷田 (こやた) 神社・寺院・史跡文化財・城址 大山祇神社・妙典寺 (単位)

江戸期は小谷田村。寛文11年(1671年)古敷谷村から分村した。現在の古敷谷字江孫(えまご)は元は小谷田村の飛び地で、享保6年(1721年)には「衛真郷」とある。

地名の由来は、「ふる(古)や(谷津)・た(処)」も転訛で、崖のある湿地という意味。または、「こや(崩壊地)・た(処)」で、地滑りを指したものか。

大山祇神社 (おおやまづみじんじゃ)

所在地 市原市小谷田字上ノ台634番地

創建時期 不詳

祭神 大山祇命

宮司 平田 常義

由緒・伝説 旧村社。創建年代・由緒不詳。

大山祇神社の本殿社と鳥居



神社の鳥居と本殿を右側風景



本殿正面の入口



本内に内宮が祀られる

妙典寺 (単位) は、現在は廃寺となり、原田の本伝寺に統合されている。

本資料は、次の資料を参考に作成しました。

- ・市原市埋蔵文化財センター遺跡ファイル
 - ・ちょっと便利帳（日本の元号・年代早見表）
 - ・全国遺跡報告総覧
 - ・日本の城郭・城址（千葉県版）
 - ・寺社にまつわる伝説（市原市 その2）
 - ・市原市・宗教法人一覧
 - ・市原の城郭と国府跡をたずねて
 - ・Wikipedia- 市原郡
 - ・市原市歴史と文化財シリーズ
 - ・いちはら歴史の旅人
- ・そのほかに、紹介した寺院・神社の関係者の方々の協力を頂きました。

加茂富山地区の地名の由来と史跡と文化財

発行・編集 市原の歴史を知る会

住所 市原市能満1020番地1

連絡先 090-3545-1113